巻頭言

「元気高齢者」という括り

片岡 輝（ワーカーズコープ常勤顧問・詩人・東京家政大学名誉教授）

括りが産み出すもの

「元気高齢者」というネーミングを聞くと落ち着かなくなる。反射的に「元気」という括りから外れてしまう人を思い浮かべてしまうからだ。

「元気」というカテゴリーは、必然的に高齢者を２つのグループに束ね、無意識のうちに「元気のある高齢者」と「元気のない高齢者」とに選別・分断し、引いては彼我に優劣の心性を醸成して差別を産み出す構造をつくり出してはいないだろうか。

1929年生れの詩人・新川和江さんの良く知られている作品に、「わたしを束ねないで」と題した、1968年に発表された詩がある。

わたしを束ねないで
あらせいとうの花のように
白い葱のように
束ねないでください
わたしは稲穂
秋　大地が胸を焦がす
見渡す限り金色の稲穂

わたしを止めないで
標本箱の昆虫のように
高原からきた絵葉書のように

止めないでください
わたしは羽撃（はばた）き
こやみなく空の広さをかいさぐっている
目には見えないつばさの音

（第３連省略）

わたしを名付けないで
娘という名　妻という名
重々しい母という名でしつらえた座に
座りきりにさせないでください
わたしは風
りんごの木と泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで
，（コンマ）や．（ピリオド）
いくつかの段落
そして　おしまいに「さようなら」が
あったりする手紙のようには
こまめにけりをつけないでください
わたしは終わりのない文章

川と同じに
はてしなく流れていく
拡がっていく　一行の詩

束ねようとする力に抗い、カテゴライズされない自由を謳うこの詩は、1980年代にやって来るウイメンズ・リベレーションを先取りしているが、ジェンダーを超え、時代を超えて、同調圧力へ立ち向かおうとする個へのエールとして、今なお燦然と輝いている。

長寿時代の潮流

総務省統計局と厚生労働省のデータによると、日本人の平均寿命は、1970年代から大きく上昇カーブを描き、60歳以上の就業者数の延びをみると、1970年の450万人台から2013年には、ほぼ３倍弱の1200万人台に増加している。平均寿命もこの間に女性86.61歳、男性80.21歳と長寿化のカーブは上向きである。

こうした潮流の呼応するかのように、35～64歳男女6000人を対象とした内閣府の意識調査(2013)によると、「働けるうちはいつまでも仕事をしたい」が25.7%、「70歳くらいまで」20.9%、「65歳くらいまで」31.４%と、働く意欲は高い、というよりも働き続けないと老後が不安というのが本音ではないだろうか。

先日（８月31日）、朝刊（東京新聞）に目を通していたら、「人生100年時代を楽しく」というシニア向け講座受講生募集のお知らせが載っていた。私たちは、すでに「人生100年時代」がキャッチコピーとなる超高齢化社会に生きている！？　ふと、かって見聞きした人間の寿命120歳説や、140歳代まで生きた人のニュースなどが頭を過った。

講座の主催団体のシニア社会学会（一般社会法人・会長＝袖井孝子お茶の水女子大名誉教授）は、「人生の最終段階を自立・自律しつつ助け合って生きるにはどうしたらいいかを考えるという趣旨のもと、①人生100年丸の出航、②地域に居場所を、③NNKからPPKへ、④ICTで社会につながる、⑤安心・安全の住まい選び、⑥人生100年時代、あなたはどう生（逝）きたいですか、というテーマ設定での開講だ。

Age free societyを標榜する同学会は、自立と共生を支え合う老若男女協働参画社会の実現を目指して、シニア世代としての開かれた活動を展開しており、わが労協も高齢協も関連団体として位置づいている。

ゴールは共通だが、問題は、孤独死に象徴される個別・分断化されている地域の高齢者をどう束ねていくかである。

「束ねる」の両義性

ここで私たちは、日常活動で絶えず直面せざるを得ない「主体性」と「当事者性」の問題に立ち至る。「束ねる」vs「束ねられる」両者の「主体性」と「当事者性」の相克を止揚するにはどうすればよいのか。

本稿頭初に紹介した「わたしを括らない

で」は、ある一つの価値観で、括る対象の人間性や主体性を無視して括ろうとする力への異議申し立てとNOの意思表示だった。そこには、善意にせよ悪意にせよ全体的な暴力性が明らかに存在している。こうした「束ねる」が許されないことは、憲法の人権尊重の精神から自明なことである。

ところが、昨今の社会の風潮は、まさに時計の針を逆回ししようとしているかの様だ。いじめ、虐待、DV、ヘイトスピーチ、秘密保護法、集団自衛権行使容認…、それらに通底しているのが、ある一つの価値観で括り、対立する価値観・異論を一括りにして排除しようとする動きである。

同調圧力や情報操作や権力によるこうした「束ね」を見抜き、民主主義のルールに則って声を上げ、ストップをかけることが今、喫緊の課題であり、民意を結集する「束ね」に、知恵を寄せ合い、戦略を巡らせることに真剣に取り組む必要がある。

「元気」の再定義が問われる

「元気高齢者」とは、「元気」と「高齢者」の２語による造語であり、この造語が生れた時代的背景は、高齢者の医療費の巨額化を抑えることに併せて、超高齢化社会を目前にしての、定年制の延長に象徴される労働力の温存にあるのではないかと推察される。

もっとも、「高齢者」の「元気」を願う心性は、古来、どの民族にもあって、わが国では、「還暦」から始まって「白寿」に到る慶事が今なお盛んである。

一方、翁・媼は、童とともに集落の役を免除され、働き手から退いた。「姥捨て山」の伝説にもあるように、村落の生命線を維持するためには「高齢者」を切り捨てざるを得ない時代もあったのだ。

そこで、いわゆる先進国が軒並み人口減少期に直面している現在にあっての「元気」の中身を問い直してみたい。

現代の集合知とも言えるWikipediaでまず、「元気」の項を引用しよう。

〈・気の一つ―儒教における生成論で宇宙の根源である対極に呼応する概念、「元気・陰陽・四時・万物」の一つ。・精神の状態を表す日本語―生命力が旺盛であることや気分が上向きである等の状態を示す〉

続いて、「元気」の対概念とされる「病気」を見る。

〈西洋医学風の用語でいえば、健康というのは恒常性が健全に保たれている状態、と言い換えることも可能であろう。そいう観点からは、病気（疾病）というのは、恒常性が崩れてしまって元に戻らなくなっているか戻りづらくなっている状態と考えると理解しやすい。さらに恒常性という概念を中国伝統医学の「未病」という用語で把握しなおしてみると、病期や健康という概念がより分かりやすくなる〉

そこで、「未病」の項目を見ると、こうある。

〈・状態１:恒常性が健全に保たれている状態…健康。・状態2:恒常性が崩れつつある状態…未病。・状態3:恒常性が崩れ、そのま

までは元に戻らなくなっている状態…病気〉

さらに、「病気」の項目の「社会的状況」の段落をかいつまんで紹介すると、〈現実の社会では病気に対する見解は立場ごと・文脈ごとに異なり、さまざまな見解が複雑にせめぎ合う。実際、臨床の現場では医師と患者の見解はしばしばずれたり対立することがある〉とし、〈一般の人々は多くは自分が感じている感覚内容で病気か病気でないかを判断していて、ちょうど「本人が心身に不都合を感じ、改善を望むような状態」といった定義がそのまま当てはまるようなことが日常的には行われているが、医師の集団は医師なりの立場で生物学寄りの見方をしてみたり統計を見たりし、臨床医師では、一般論は脇に置いておいて、目前に表われた患者の個別的な症状と医学書に書かれている慣習的な判断基準を見比べて便宜的に判断する、等々、さまざまなことが行われている。それらの見解はさまざまに複雑に相互影響しあう〉

長い引用となったが、「元気高齢者」の「元気」の内容もまた、単純に言い切ることは出来ないということがはっきりと見えてきたと言えよう。

「元気」という括りが、自動的に「元気でない」という括りを生み出し、差別や排除につながる惧れがあることについては既にふれたが、「元気」が指し示す内容についての参照を進めることによって、より多様で広範囲な概念として「元気」を捉えることの方が「高齢者」の実態に即していると思えるに到った。例えば、前出の中国伝統医学でいう「未病」(心身の恒常性が崩れかけている)の状態であっても、健康人以上に精神活動が旺盛で、果敢に社会的な発言をし、周囲に影響を与えている「元気高齢者」も明らかに存在しているからである。

メインストリーミングのインパクト

1970〜80年代に数回、アメリカを視察旅行したことがあった。当時のアメリカは、ヒッピー運動、大学改革、ウーマンリベレーション、禁煙、男女均等雇用、障害者のメインストリーミングなどの社会変革の渦中にあり、尋ねるたびに目に見える形で変化が起こっていた。

中でも強烈なインパクトを受けたのが、「セサミ・ストリート」を制作していたプロダクションＣＴＷでの男女雇用均等法がもたらした職員の地位の変化と、障害者のメインストリーミングによる番組の変化だ。

ワシントンのＣＴＷを初めて訪問した時は男性が主要ポストを占めており、女性は受け付けや秘書として補助的な地位にあったが、均等法の施行後には、重要ポストの多くに女性が就いていた。

また、カーター政権の障害者のメインストリーミング(＝ノーマライゼーション)のガイドラインによって、ＴＶ番組に一定比率で障害者の出演が実現していたのだ。

これらの変革は、疎外されていたマイノリティー(黒人・有色人・女性・障害者・子ども)の活動の場と地位を保障してマ

ジョリティの中に包摂しようとするものだった。

これらのセピア色に染まったエピソードには、心を温かくする豊かな人間性の香りがする。ここで紹介した意図は、悪名高いナチの優生思想に基づくラベリング（レッテル貼り）によるユダヤ人の排除とジェノサイドに到る道を歩むのか、少数派の存在を受容し、差別を排して共生社会の実現への道を歩むのかの岐路に私たちが今、立っていると思うからである。

共生社会へのイメージ

すべての人びとが互いを尊重しつつ、助け合いながら自然と共生して持続可能な共生社会を営むには、徹底した情報公開によってすべてのプロセスを可視化して秘密の発生をゼロにし、コミュニケーションを重ねて信頼関係を築くことが基本となる。

高齢者も「元気高齢者」などというあいまいな概念で実態を糊塗したり美化することなく、それぞれの老いを直視し、平準化することなく現実を正確に把握した上で、それぞれの持てる能力を寄せ合う協働の仕組みと地域を創出するために、主体的に参画・貢献することが必要だし、事業体には、多様な構成員をありのまま受け入れる柔軟性と人間的な温かい対応が求められることになろう。

異なった世代・異なった生活文化や価値観や経験を持つ人々が共存する共生社会を高齢者の立場からイメージする一つのヒントとして、歴史人口学・経済史の研究家の鬼頭宏上智大学教授の『人類初の「長い老後」活用を』と題した所論（朝日新聞8/19）の一部を紹介する。

〈日本社会の高齢化は、ただ高齢者が増えたということではありません。高度成長期以降、日本人の寿命は大きく延び、長い「老後」を持つようになった。極端にいえば、昔の日本人とは違う生き物になったんです。…

平均寿命が初めて50歳を超えたのは男女ともに1947年ですが、今では女性は86.61歳、男性は80.21歳です。…

平均30年もの老後を持つのは、これまで人類が経験したことがない。長い老後をどう使うかが、大きな課題になります。…

いまは産業や家族構造が変化し、高齢者の出番をなくしてしまったところがある。その中で、高齢者が働くことの利点をどうやって見つけていくか。

フランスのシルバーバレーという会社では「老老介護」をやっています。弱った高齢者の介護を元気な高齢者にさせる。高齢者どうしで気持ちがわかるので、評判はいいそうです。これまで考えていなかった働き方も、やってみれば案外うまくいくかもしれない。

日本社会は、何歳のときには何をするという年齢意識が非常に強くて、18歳で一斉に大学に入り、22歳で就職する。でも、子どもでも成長段階には一人一人違いがある。まして高齢者の場合は、同じ70歳でも知識や能力、技術、体力の個人差が非常に

大きい。一律に70歳まで働けということ事態に無理がある。

70歳まで働ける社会をつくる必要はあります。でも、みんなが70歳まで働く必要はないし、70歳になったら働くのをやめる必要もない。もっと多様性をもった社会にしていくべきです。

「長い老後」は、人類が初めて手にした貴重な資源です。それを活用できる時代が来たと、前向きにかんがえてはどうでしょう〉

示唆に富んだ提言である。「老老介護」の事業化は、すでに労協グループで試行錯誤を重ねており、その一部は、映画『ワーカーズ』で公開され、大きな関心と共感と反響を呼んでいる。

私たちが持っている貴重な「元気高齢者」の生きざまの先進事例の数々を「束ね」て面としつつ、若者・子どもたちの清新なパワーと協働して、地域の人々を包摂した「私たちの街づくり」を進めよう。

〈子どもたちは時代を選ぶことなくこの
世界に生れてくる
その子どもたちに私たちはどのような
未来を手渡そうとしているか
人として
この暗雲立ち込める時代にあって
希望のともしびをこそ掲げよう
高らかに
いまこそ時代を切り拓き
力強く生きて行こう
子どもたちの未来のために
愛する者の幸せのために
いまこそ時代を切り拓き
力強くいきて行こう
人々との固い絆結んで

私たちは
時代が変わろうとこの世界がもがいて
いるその苦しみの中で
信念と決意を持ち未来を築こうとして
いるか
人として
この混迷極まる時代にあって変革の志
をこそ固めよう
高らかに
いまこそいのちをつなぎあい
心豊かに生きて行こう
愛するこの街あの町で
いまこそいのちをつなぎあい
協同の旗を風になびかせ〉

ワーカーズコープ働く仲間の歌
「時代を切り拓いて」
片岡輝・詩　信長貴富・曲より